

津市図書館有造館文庫と『有造館書目』

中川 豊

はじめに

津藩は藤堂高虎以来、幕末まで、一度の国替えもなく藤堂氏が領した。十代藩主は藤堂高兌たかさわで、今に不世出の名君と讃えられている。高兌の治世の時期は、およそ文化文政期だが、この頃は、津藩も他藩にも見られるような財政逼迫にみまわれていた。そのような状況の中、文政三年（一八二〇）、津阪東陽らの協力の下に津藩藩校有造館は開校せられた。以後、明治四年（一八七二）の廃藩置県まで、およそ半世紀にわたり、藩の教学の場として存続した。現在、有造館に伝来した蔵書の一部が、津市図書館有造館文庫に伝存している。また、上野市立図書館にも若干残る。さらに国立国会図書館、宮内庁書陵部にも所蔵されているようである。¹本稿では有造館文庫の蔵書構成、有造館の旧蔵書目録『有造館書目』・資料紹介などについて述べるものである。

一 有造館文庫の蔵書構成

まず、有造館文庫の分類綱目ごとの書名点数（タイトル数）を挙げる。近世国書・近代国書・近世漢籍・近代漢籍と大きく分類した。その上で国書の分類は日本十進分類法に準拠し、漢籍は『内閣文庫漢籍分類目録』における四庫分類法によって分類した。なお、近世の刻成にかかわる明治期の後印本は、近代資料として組み込んだ。

近世国書	000 総記	3 点
	100 哲学	22 点
	200 歴史	53 点
	300 社会科学	9 点
	400 自然科学	53 点
	500 技術・工学・工業	3 点
	600 産業	4 点
	700 芸術	7 点
	800 言語	12 点
	900 文学	36 点
近代国書	000 総記	1 点
	100 哲学	8 点
	200 歴史	32 点

	300	社会科学	40点
	400	自然科学	4点
	500	技術・工学・工業	なし
	600	産業	3点
	700	芸術	3点
	800	言語	12点
	900	文学	3点
近世漢籍	経部	9点	
	史部	22点	
	子部	9点	
	集部	2点	
近代漢籍	経部	なし	
	史部	4点	
	子部	5点	
	集部	なし	

資料総点数は三五九点。江戸初期より一度の改易もなく伊勢伊賀を治めた三六万石の大名、藤堂氏の藩校の蔵書としては、あまりにも乏しい。明治初年の混乱期の散逸、戦中の焼失などが常識的に考えられる。

近世国書のうち、「200歴史」は、比較的点数が多いものの、『国史略』『続日本王代一覽』『大日本史』『日本

外史』など、藩校にごくありふれたものとなっている。「400自然科学」は、五三タイトルのうち、三五タイトルが和算関係の蔵書である。「900文学」は、一二点が軍記物語である。江戸時代前期の写本『慶長軍記』・寛文一〇年（一六七〇）刊行で、非常に刷りのいい『義経記』など、注目すべきものもある。近代国書「300社会科学」の四〇点は、明治期の小学校の教科書類が大半である。有造館の学舎を使用して明治六年（一八七三）に創設された小学第一校を、明治十一年（一八七八）に改称した養正学校や、さらにその後身である養正高等小学校の旧蔵書が多い。近世漢籍については、有造館が藩校であるという性質を考慮すれば、極めて少ない点が指摘できよう。近世国書・漢籍については、結局のところ、養正学校のような近代の学校への引き継ぎに際して、必要と判断された書籍（歴史・和算など）が、結果的にこのように残ったのであろうか。

二 『有造館書目』

ところで、鹿児島大学玉里文庫に「有造館書目」と称する、近世の蔵書目録が伝わっている。簡単に書誌、概要を記す。⁽²⁾

『有造館書目』鹿児島大学付属図書館玉里文庫蔵 請求番号 天—88 775 1—4 写本四冊で、経部・史部・子部・集部の各部に分冊。内題なし。外題「有造館書目」。各点数ごとに書名、注記（撰・編者、部数など）、冊数が記されてある。注記には時折「写本」と記してある場合もあるのだが、写本であっても、必ずしも「写本」と明記してあるとは限らない。成立年代は、奥書等がないので、はっきりしないが、集部に、初印が天保一二年の『山陽遺稿』、同じく初印が天保一二年刊の『紅蘭小集』が掲載されていることや、現在有造館文庫に所蔵されてい

る天保一四年刊行の『隋書』（高松藩による覆刻本 有一四三二～一四五五）が、『有造館書目』に見えないことなどから、天保一二・三年頃の成立と推定したい。従って、それ以後の刊本は拳がついていない。行間に小文字で蔵書を書き加えている場合が、まま見られる。目録が成立した後、蔵書の増加にともない、随時書き加えられた様子が窺えるのであるが、増加分の書名を見ても、天保一二・三年をさほど下らない頃の書き入れではないかと判断される。なお、国書も四庫分類によって分類されている。

さて、『有造館書目』は、津藩の藩校有造館の蔵書目録と断定してよい。例えば、「四書白文 養正寮 三冊」などと、書名の下に「養正寮」と書かれてある場合がある。養正寮は、津藩の「藩士の子弟を収容して、読書、習字、礼節、算術等を教える教場」であった。場所は、有造館のすぐ南に位置した。『四書白文』は、一時的なことかもしれないが、有造館ではなく、養正寮に所蔵されていたと解し得よう。さらに、『有造館書目』史部に、『伊勢参宮名所図絵』が拳がつており、「復古堂本」と注記がある。「復古堂」が誰を指すのかは、不明であるのだが、今、有造館文庫蔵の『伊勢参宮名所図絵』（有三三四四～三三五二）を繙くと、各冊に「復古堂図書記」の蔵書印が捺されてあり、『有造館書目』が指すところのそれと判明する。これらの点から、『有造館書目』は、明らかに津藩藩校有造館の蔵書目録といえる。⁽⁴⁾

『有造館書目』に記されている蔵書点数を、各冊ごとに記そう。

- | | | |
|---|----|------|
| 1 | 経部 | 二八五点 |
| 2 | 史部 | 六八三点 |
| 3 | 子部 | 七二〇点 |
| 4 | 集部 | 四六三点 |

合計は、二一五一点である。そこで、『有造館書目』に挙がる書名と、有造館文庫の蔵書名を突き合わせ、残存する書籍を摘出してみた。同一資料か否かについての判断基準は、『有造館書目』に挙がる、書名と冊数の一致をもって同一と判断した。書名については外題・内題の不一致、漢字・仮名書きの違いなどがまま見られるが、同じ資料を指していると判断した場合は同一資料ととらえた。

1 経部

孝経發揮 十三経註疏 説文解字真本 正字通 康熙字典 隸弁

2 史部

漢書評林 後漢書 三国志 晋書 五代史 明史 日本書紀 日本書紀通証 続日本紀 日本後記(塙保己一校刻本) 文徳実録 類聚国史 扶桑略記 古事記伝 大日本史 神皇正統記 国史略 皇朝史略 続皇朝史略 史徴 和漢年契 栄花物語 前太平記 源平盛衰記 東鑑 愚管抄 百練抄 南山巡狩録 結城氏聯芳遺墨 陰徳太平記 日本外史(写) 日本外史 藩翰譜 朝鮮軍記大全 日本古今人物志(ママ) 御蔭参日記 御蔭参詩 新著聞集 姓氏解 新撰姓氏解 逸史 伊勢参宮名所図絵 制度通 礼儀類典 祝詞解 大内裏図考証 大神宮儀式解 大清律例 令義解 隸続 玄秘塔碑

3 子部

成形図説 農業全書 本朝天文 初学天文指南 大成算経 精要算法 括要算法 続神壁算法 弧矢弦叩底 算法点竄指南 算法点竄指南録初編 算法点竄指南録二、五 点竄初学抄 算法点竄手引草 改精算法 改精算法改正論 本朝算鑑 続算学小筌 算法極形指南 算法変形指南 渡海標的 算法便覧 算法古今通覧 算法円理冰积 円理規矩算法 算法発隠 社盟算譜 古今算鑑 算法側円詳解 算法地方指

南 算法地方大成 算法点竄手引草 米庵墨談 米庵墨談続 草露貫珠 歴代草書撰 本草啓蒙名疏 貞
丈雑記 多気窓螢 三才図絵 和名類聚鈔 東雅

4 集部

なし

点数は、経部六点・史部五点・子部四二点・集部なし、となる。合計九九点。以上が、天保一二、三年頃までに有造館に所蔵され、現在有造館文庫に伝来している書籍名である。わずか四・六%の残存率となる。

三 有造館文庫の善本

以下、有造館文庫に残された有造館旧蔵本のうち、めぼしい資料を取り上げ、蔵書印を手がかりに、伝来・内容などについて簡略に述べたい。

①『佩文韻府』一〇六卷（欠卷六六上） 九四冊（有二六七二〜二七六五）

蔵書印「崇広／堂記」「有造／館記」（図1）

「康熙五十年十月」と序文にある清刊唐本。蔵書印の崇広堂しゅうこうどうは伊賀上野藩校の名称。伊賀上野藩は藤堂家支配の津藩領であった。このように、有造館文庫に崇広堂の蔵書が伝わる点や、また逆に崇広堂の旧蔵書を現在所蔵している上野市立図書館に、有造館の蔵書印「有造／館記」が捺されているものもある。藤堂藩領内における津・伊賀上野、両藩校での書物移管が考えられよう。⁵⁾

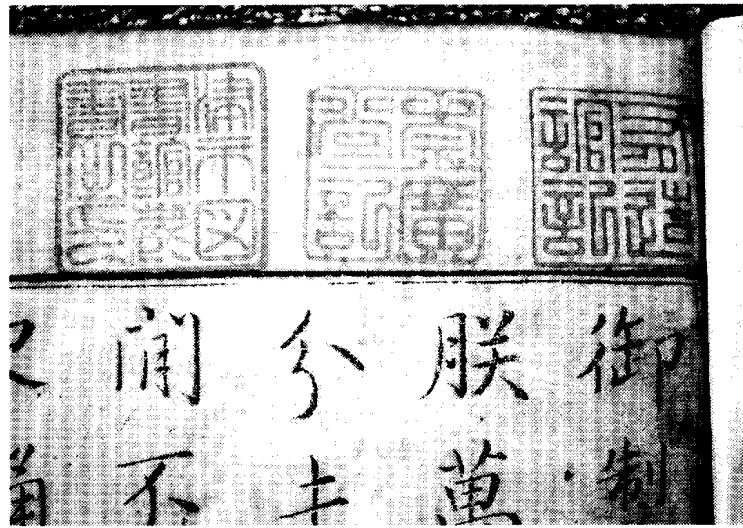


図1 中央「崇広／堂記」右「有造／館記」

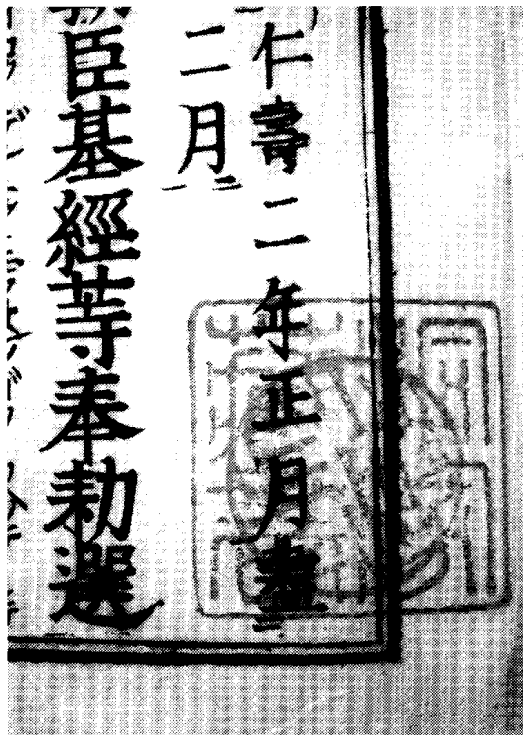


図3 「洞家／蔵書」(上より消印)



図2 「殿春／館記」

②『三国志』六五卷 四〇冊（有五八一〜六二〇）

蔵書印「殿春／館記」（図2）「有造／館記」

「寛文十年三月 吉祥日 浪華書林 洪川清右衛門 松村九兵衛」との刊記がある和刻本。「殿春館」は、『新編蔵書印譜』（青裳堂書店 平成一三年一月）などによると、藤堂光寛（滌斎）を指す。伝来からしても光寛の旧蔵書と判断してよからう。光寛は、宝暦五年（一七五五）生まれ、文政九年（一八二六）没。津藩家老。藤堂数馬家第六代。有造館の設立に際しては、藩主藤堂高兌のもと、津阪東陽とともに奔走した人物である。『三国志』には有造館の蔵書印も捺されており、光寛の所有から、有造館の蔵書に帰したものと考えられる。光寛は家老という立場上、有造館設立に関与したが、その一方で、自身の個人蔵書をも寄贈し、蔵書の充実に協力したのではないか。

③『日本文徳天皇実録』一〇巻（欠巻1〜3） 七冊（有三三三三〜三三三二九）

蔵書印「洞家／蔵書（消印）」（図3）「有造／館記」

「肯宝永六丑季春吉辰 御書物屋 出雲寺和泉掾」（入れ木）「天明八申歳焼失 寛政八辰歳校訂新彫 元章」の刊記をもつ。蔵書印の「洞」は内宮権祢宜の蓬萊家の姓、「蓬萊」以前の屋号である。最終巻裏表紙見返しには「天保三年冬、需之 洞尚道蔵」と、購入した時点での識語がある（図4）。尚道は、蓬萊尚賢の親族であろう。この他、神宮祠官の旧蔵書として『日本古今人物史』（有一一五四〜一一六〇）、『神宮雜例集』（有三五五二）、『小朝熊社弁正記』（有三五四四）が知られる。『日本古今人物史』は「寛文九年」の刊記をもつ。蔵書印「春木氏」が捺されており、外宮権祢宜の春木氏の旧蔵書と知られる。『神宮雜例集』は、「龍氏／熙方」の蔵書印、ならびに「寛文三癸卯年林鐘下旬書写之畢 竜氏熙方」の書写奥書がある。龍氏は外宮の祠官。熙方転写旧蔵本である。『小朝熊社弁

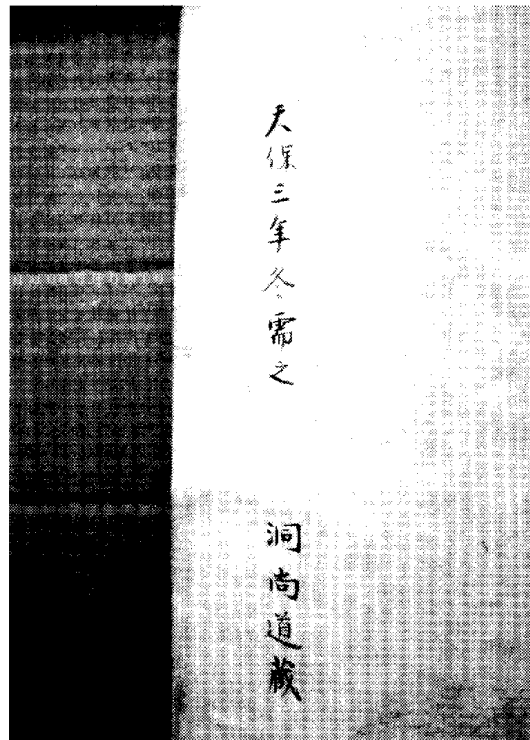


图4 蓮菜尚道識語

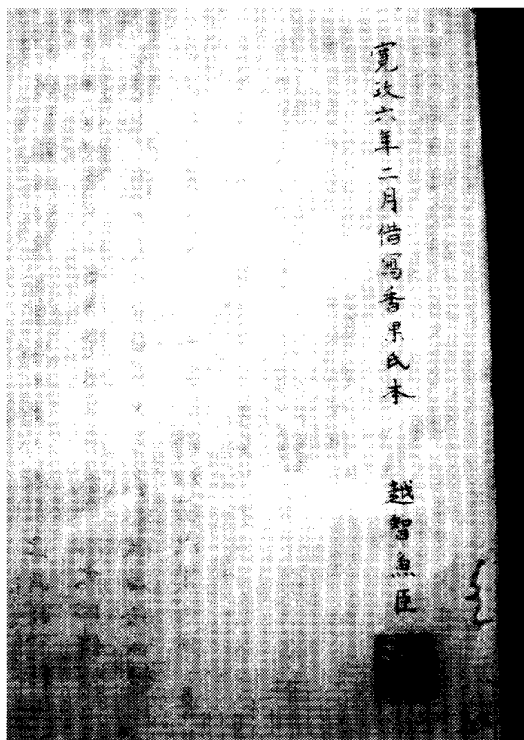


图6 越智魚臣書写奥書

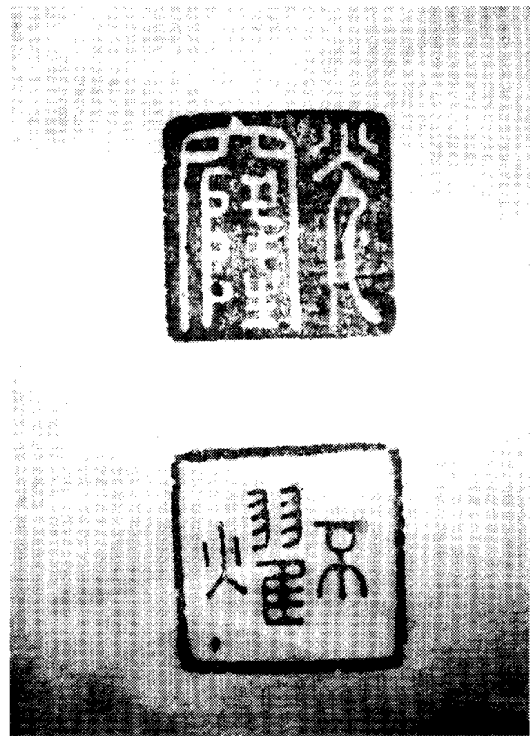


图5 上「光／隆」下「不／燿」

正記』は、「熙／光」の蔵書印が捺されている。筆跡は『神宮雜例集』の熙方の筆跡に酷似している。「延宝五歳次丁巳孟春穀旦尚舎散人竜氏謹誌」「延宝八曆庚申花朝下旬書写之畢 秦氏重貞」の奥書をもつ。

かくのごとく、神宮関係者の旧蔵書がままみられるのであるが、どういう経路で有造館にはいったのかが興味深い。明治初期になって流出した蔵書を、養正学校などが購入したとは考えにくい。献本であろうか。あるいは神宮祠官と、津藩藩士の、個人レベルでの交流から借り出したものが、いつのまにか有造館の書庫に帰したのであるか。

④『精要算法解』 四卷 五冊（有二二八九、二二九三）

阪部広胖著 村田光隆校

蔵書印 卷之一「有造／館記」□□如拙「如拙／蔵書」「光／隆」「不／耀」（図5）・二上「有造／館記」□□如拙「如拙／蔵書」「光／隆」「如／拙／蔵」。

著者の阪部広胖は、幕府の火消与力。のち浪人。和算家。宝曆九年（一七五九）生、文政七年（一八二四）没。校訂者の村田光隆は、津藩士。和算家。延享四年（一七四七）生、天保二年（一八三一）没。八五歳。字、不耀・不曜。号、如拙。孫の恒光も和算家として知られる。蔵書印・伝来から、村田光隆旧蔵書である。著者広胖は、校訂依頼のため、自著『精要算法解』を村田光隆に送付し、それを光隆が所持したものであろう。従って、本文は広胖自身で、著者自筆本であらう。他筆がままみられるが、それが光隆の筆と目される。『国書総目録』によると、伝本は三箇所、五本が知られる。諸般の事情により未調査であるが、今後、他本との比較により成立過程を明らかにしたい。該書の他、「如拙／蔵書」の蔵書印が捺されている蔵書に、『算法地方指南』『杜盟算譜』『括用算法』が

ある。ただし、『算法地方指南』の初版は、天保七年で、光隆没後の刊行であるから、蔵印使用者は光隆ではない。孫の恒光が、引き続き使用したのであろうか。

前述のように、有造館文庫のうち、これら和算の類は、比較的多く伝存している。和算と天文類の蔵書が、いかに残存しているかをみると、『有造館書目』のうち、子部に載る本朝の「天文算法類」の蔵書点数は、九四点。そのうち有造館文庫の蔵書で、書名が一致するのが三〇点である。およそ三分の一が残っていることになる。他のジャンルに比して、残存率が、格段に高い。有造館文庫の蔵書構成のうち、一つの特徴として指摘しておきたい。

この他、賀茂真淵著越智魚臣（上田秋成門人）書写『延喜式祝詞解』（有 一二六六―一二七〇〔図6〕）・初代養正学校校長であった川村寛（有造館督学川村尚迪の養嗣子）の寄贈になる、藤堂高兌撰『聿脩録』（有 四四四・四四五）・江戸前期の書写になる、久居藩士植木悦著『慶長軍記』・大本で保存状態もよく、筆跡の優れた『大内裏図考証』（有 一六二一―一六八二）などが佳品として挙げられる。

最後に

平成一六年三月、津市図書館から『有造館文庫目録』が刊行された。本稿は、この目録刊行を期に、筆を執った次第である。『有造館文庫目録』は、資料ごとにタイトル、著者・編者名、刊行年代、丁数、蔵書印などを記し、書名索引を付した。有造館文庫については、これまで図書館レファレンス室に備え付けの仮目録が一部置いてあるに過ぎなかった。有造館文庫の資料利用点数は、平成一五年一月から一六年四月二一日現在まで、およそ一年四ヶ月の間、三点である。この利用点数が多いか少ないか、一概には述べがたいが、すでに目録が刊行されている橋本

文庫（全三〇八六点）・稲垣文庫（全一五六三点）の利用点数が、それぞれ四一・三一点と、蔵書量の違いはあるものの、明らかに少ない。橋本文庫・稲垣文庫以上に、有造館文庫の存在が、市民・専門家の間に、ほとんど知られていない、という現状の証明であろう。

『有造館文庫目録』の刊行を期に、今後、津の歴史調査、藩史研究の方面から、この目録が有効に活用されることを願ってやまない。

注

- (1) 国立国会図書館編『国立国会図書館蔵書印譜』（青裳堂書店 一九九五年・三月）、宮内庁書陵部編『書陵部蔵書印譜 下』（一九九七年・三月）参照。
- (2) 国文学研究資料館のマイクロフィルムによる。
- (3) 梅原三千氏等『津市史 第三卷』（津市役所 一九六一年・十一月）三七頁。
- (4) 第三三回三重大学歴史研究会「有造館と崇広堂の軌跡をたどる―蔵書分析から見えるもの―」（二〇〇四年一月二四日発表資料）に、「聿脩録や高山公行状、高山公傳記、高山公年譜、宗國史稿、忠勤録など津藩とかわりのある書名が二九部五五冊の記述がみられる。↓津藩の有造館書目であるということが確認できると考えられる。」と、津藩に関連した書籍の部数をもって、津藩の目録であると述べている。
- (5) 井上進氏『上野市立図書館漢籍目録』（上野市立図書館 一九九四年・九月）所収「上野市立図書館所蔵の漢籍類について」参照。
- (6) 北岡四良氏『復刻 近世国学者の研究』（皇學館大学出版部 一九九六年・十二月）二七一頁。

(7) 前掲注4の発表資料に、「天文算法類が非常に多くあることは大変興味深く、特徴といえるものかもしれない。」との指摘がすでにある。

(8) 後藤裕文氏「有造館図書と郷土資料」(津市民文化 第二五号 一九八八年・三月) 参照。

〔付記〕 拙稿をなすにあたり、高倉一紀氏・柳沢昌紀氏のご助言を賜りました。心より御礼申し上げます。